
爺ちゃんと僕と

広江 七横

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爺ちゃんと僕と

【Nコード】

N3689J

【作者名】

広江 七横

【あらすじ】

爺ちゃんが入院した事を聞いた『僕』の短いお話。

それは僕が結婚を控えた冬の出来事。僕と彼女の両親の顔合わせも終わり慌ただしい日々の中、少しずつ結婚の二文字が現実味を帯びてきた時期の事だ。

早朝、携帯電話のアラームが、けたたましく鳴っていた。僕は連休明けの重たい体を起こし、今日からまた仕事だという現実に向き合う。アラームを消し、そのまま携帯の待ち受け画面に目をやるとメールが一件届いていた。母からのメールだった。

実家を出てからというもの、何事にも大ざっぱでいい加減な人間の僕は、用事がなければ実家とは連絡をとっていなかったし、実家からも連絡がくるといふ事もなかった。そんな母からのメールを不思議に思いつつ開いてみると「お爺ちゃんが昨日、入院しました。」と短い文章が綴られていた。

今思えば爺ちゃんはかなりの高齢で、数日前に体調が余り良くないという話は聞いていたので、驚く事では無かったのかもしれないが、一瞬、僕はこのメールをたちの悪い冗談ではないかと思った。いや、現実を真っ直ぐに直視出来ず、受け止められなかっただけかもしれない。

爺ちゃんは年相応に足腰は弱くなり耳も遠くはなっていたが、呆ける事もなくしつかりとしていて、今でも僕の中では小さな頃から優しい爺ちゃんのままだし、一度も大きな病気などにはかかっていなかった爺ちゃんと、入院という言葉が僕の頭の中で繋がらなかったのだと思う。

そんな現実を目の前にした時に僕という身勝手な人間は、爺ちゃんの事を色々と思い出した。

最近は何に一度会うぐらいだったけど、あの優しい笑顔と声だけ

は忘れる事はなかった。小さな頃、二人で出掛ける時に迷子にならないように繋いでいたあのシワシワの大きな手も忘れられない。

まだ僕が小学生だった頃、爺ちゃんは近くに住んでいた事もあって毎日のように遊びに行っていた。その頃、すでに七十歳を越えていた爺ちゃんとは一緒に遊ぶという事をあまりしなかったが、僕が詰まらない話をして嬉しそうに聞いていてくれたのを覚えている。

そんな爺ちゃんと映画を観に行った時などは嬉しくてしょうがなかった。一度、毎年見ていたアニメの映画では無く、怪獣の映画を観に行った時に冒頭の雰囲気は幼かった僕には怖すぎて、怪獣が出てくる前に僕は大泣きした。僕と爺ちゃんがすぐに映画館を後にしたのは言うまでもないが、そんな恥ずかしい思い出も今となっては爺ちゃんとの大切な思い出の一つだ。

母からメールをもらった僕はすぐに実家へ電話をした。爺ちゃんの容態は？ 何処の病院に入院した？ それ以外にも色々と母へ訪ねた気はするが、細かい内容は余り覚えていない。

母からの返答でその時の僕が理解した事は、爺ちゃんの意識はハッキリしているが高齢の為、けつして良い状況ではない事。入院先は実家の近くだが、お爺ちゃんは話すのが辛そうだから今日はお見舞いには来るなという事だった。

母の話を聞いた僕は、その日の仕事を休む事が難しかったのもあって『分かった』としか答えられなかった。

その日の仕事はまったく集中出来なかったのを覚えている。まだ爺ちゃんに彼女を紹介していなかったし、結婚する事も伝えていなかった。曾孫も観て欲しいから爺ちゃん、もつと長生きしてと言いたかった。こんな時になって色々な言葉が頭を過ぎる。伝えるチャンスなんていくらでもあった、でも伝えられなかった……。

僕は仕事を終わらせ、すぐに実家へと電話をした、明日爺ちゃん

のお見舞いへ行く事を決めたからだ。

「だけど母から伝えられたのは『さつき爺ちゃんが亡くなった』という現実だった。」

頭の中が真っ白になるといふのはああいう感覚を言うのだろう。

その時の僕の胸の中は悲しさと後悔だけで一杯になったんだと思う。でも、不思議と涙は流れてこなかった。やっぱり無意識にでも頭の片隅にはこうなる事を想定していたのだろうか？ この日ほど僕は自分という人間が嫌になった日はない。行動力は無いくせに後悔だけは一人前にする、そのくせ冷たい。あんなに好きな爺ちゃんが死んだのに涙一つ流さない。本当は悲しくないのか？ こうなる事を予想していたんじゃないか？ 自問したが答えは分からなかった……。

翌日、家族と爺ちゃんに会いに行った。母は葬儀の段取りをしているせいか、慌ただしく動いていたが、父は流石に落ち込んでいないよう。今までに見た事の無い表情をしていた。

爺ちゃんは声を掛けたら返事をしてくれそうなくらい綺麗な顔をしていて、眠っているようだった。そんな爺ちゃんを前に線香をあげ手を合わせる。

爺ちゃんを見つめながら父は僕に呟いた。

「爺ちゃんにな、こないだお前が結婚するって話したら、嬉しそうに、おめでとぅって言ってるな……」

爺ちゃん結婚の事、知っててくれてたんだ。そう思ったが父の言葉に僕は答える事が出来なかった。

爺ちゃん喜んでくれたのかな？ でもね、僕は爺ちゃんに直接伝えたかったんだ……。

今度結婚するんだよって。

言いたかったんだ……。

この人と結婚するよって。

僕に言っただけじゃなかったんだ……

あの優しい笑顔で『おめでとっ』って。

気が付くと僕は「ゴメンね……」とだけ呟いて爺ちゃんの前で大泣きしていた。

もう爺ちゃんに直接伝える事は出来なくなっただけどころだけとは言っておきたいと思う。

今まで優しくしてくれてありがとう爺ちゃん。大好きだったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3689j/>

爺ちゃんと僕と

2010年10月20日20時06分発行